

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ 元海援隊士 石田男爵の煮物好き

-集落活動センターなかやまの郷土史研究活動から

中村茂生（安田町地域おこし協力隊）



「石田男爵は煮物が大好きじゃつたと。中山へ来たときはいつも煮物を食べてもらいたいよつたと聞いたことがあるぞね。」

男爵石田英吉は、安田町中ノ川（中山地区）出身で、海援隊士として龍馬とともに動乱の幕末を生き抜き、明治になつて各県知事、元老院議官、農商務省事務次官などを歴任、男爵に叙された人物です。

およそ2ヶ月の調査での貴重な手がかり

平成25年、安田町中山地区に「集落活動センターなかやま」が開設され、同センターに配属されているふるさと応援隊を事務局として特産品づくりや生活支援サービスなどに取り組んでいます。そ

ういった事業の中に、地域の歴史や文化の継承も取り入れようと、中山地区で生まれ育った石田英吉の再発見を目指した調査・研究に着手しました。9月4日、その第1回報告会をセンターの会議室で開きました。冒頭に引いたのは、その会に来てくれた方が披露してくれたお話を。

海援隊や海援隊士については、坂本龍馬とその仲間たちという文

脈の中でそこそこ注目されてきたと思います。その中で、石田英吉はやや地味な存在です。

龍馬の残した手紙の中にはもちろん石田に触れた箇所もありますが、そこに特別な、例えば師弟関係、信頼関係が読み取れるほどのものはありません。一方石田も龍馬について何も語っていない。強いていえば『坂本龍馬伝』（千頭清臣著1914年博文館）に協力者として名前が挙げられている程度です。龍馬亡き後の活動を見ても石田が海援隊の中枢にいたことは間違いありませんが、龍馬本人とは案外距離があつたのかもしれません。そんなこともあってあまり注目されないのでしょうか。

もはや我々が隣人

石田英吉の生涯や事績を扱った文献も多くありません。でもおかげで、ここまでわざか2ヶ月程度の調査にすぎませんが、すでにいくつか発見がありました。また明治以降、長崎、秋田、千葉などの知事時代の仕事についてはこれまでほとんど知られていましたが、今回各県の図書館、博物館、文書館の協力を得られ、相当な資料が集まりつあります。

それでも何より貴重に感じられるのは、石田男爵の煮物好きというエピソードが聞けたことです。こ

れは資料調査で得られる種類の情報ではありません。煮物好きだとわかつたところでもちろん歴史的な評価には何ら影響しませんが、故郷中山の煮物に舌鼓を打つ姿が脳裏に浮かべば、石田英吉はもはや我らが隣人です。地元だけに伝わっているこのささやかなエピソードを、消え去る前に掬い取れたことに

は、中山地区の郷土史研究活動にとっては意義深いこと

明治維新150周年に向け

新しい発見や、明治以降の活動を含めた石田英吉の全体像

は、平成28年4月を目標に、センター内に展示をつくり紹介する予定です。

ちょうど明治維新150周年に向けた観光キャンペーンもはじまりました。北川村の中岡慎太郎館は

その拠点のひとつになるでしょう。そこを訪れるひとの大半は、国道55号線を東に向かうはず。その途中、



安田町集落活動センターなかやま会議室で開かれた報告会の様子

ます。ほんの少し人の流れを変え、寄り道してもらうことは難しくないはずです。となれば地区のみなさんには、展示解説でおもてなしをお願いしたいところです。県内外の観光客に石田英吉を知らしめ、その過程でわれわれは山への愛着をいつそう深めていく、そういうことを願いながら、まずは調査を進め、報告会を重ねていきたいと思います。

「国家は文学でできている

宮川
禎一

「文学部不要論」を聞いたことがあるだろうか？今年六月に文部科学省から国立大学改革問題に關して「実用學問が優先であり、經濟に役立つ人材の養成を第一とし、文学部は廃止を含めて検討すべし」との方針が示されたのだ。国立大学文学部出身の筆者には聞き捨てならない話である。

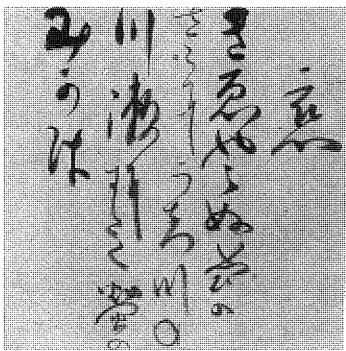
実利か趣味かの話なのであるらうか。國家に役立つ人材を國費で育てることが肝要で、文学部で考古学や平安時代史などを研究する学生は日本国には無用との考え方だらう。

これに対しても、「いやいや文學を含む人文科學の考え方は自然科学や社會科學の根底になるもので決して無用ではありません」という文学部擁護論を目にのせるのだが、そんな謙虚な物言いで「切り捨てないで下さい」と裾にかかるのもどうかと思う。

あえて言わせてもらうならば、この世の様々な學問の中、「天文学」と「文学」とが最

を信用しない法学などはかなり低位のジャンルである。もっと言うならば、人間は文學なしでは生きられないし、國家は憲法や軍事力ではなくて文学で守られているのだ。「源氏物語」や「奥の細道」や「龍馬がゆく」や「IQ 84」を読む者がいなければ日本もないのである。現在の世界情勢を見わたせば諸外国は「空虚な国家を文学で満たす作業」に汲々としていることが分かる。一方、日本の文部科学省は國家に役立つ学問か否かという視点で文学部を廃止に追い込もうとしているが、それが亡国への第一歩であることに全く気が付いていないのである。ただし紫式部も松尾芭蕉も国立大学文学部には行っていないのであるが・。

（前回、私の亡父が宇佐八幡宮で溥儀を見たと書いたが、手を尽くして調べると史実ではないらしい。なぜ父がそう言い、筆者がそう記憶したのか、不思議である）



「坂本龍馬自筆の和歌」（京博蔵）
「恋 きゑやらぬ思ひの さらにうち
川の 川瀬に すだく螢の みかは」

コラム・龍馬のこと

「島で出会った“龍馬”」

小林 幸代

東京から160キロの孤島、新島で坂本龍馬の名を見付けた時は本当に驚いてしまった。島の博物館によると土方歳三戦死後に最後の新撰組隊長を命じられた相馬主殿は、龍馬暗殺の嫌疑を取り調べを受け、結局、終身刑として新島に流された。はつきりとした罪名は不明だが島の流人帳にその名が記されている。笠間藩。

流人の中には教養の高い人もいて、相馬のその一人であり、多くの島民に学問を教え、慕われたという。2年後に赦免されるが、子弟との別れに臨み和歌を詠んだ。それを書いた柱が残っている。

「さながらにそみ」わが身はわかるとも 砥の海の深き心ぞ |

せっかく親しくなったのに私は別れることになってしまった。けれど学問で結ばれた皆さんの深い心はいつまでも忘れない…そんな意味である。

私は16年前、新島に教員として赴任した（今はそのすぐ隣の式根島にいる）。だから、こんな歌を残した相馬に魅かれるものがある。私は龍馬が好きだけれど、龍馬に繋がる若者達にも好意的だ。だって、考え方や方法は違っても皆、あの激動の時代、何かしら悩みもがき、行動した若者なのだ。

いよいよ18歳選挙権が決まり、たった二人の島の中学校三年生にその話を向けると、「ちゃんと投票できるかなあ?」と大いに緊張し不安な顔をした。(おいおい。大丈夫?幕末ではね…)と言いたい所だったが、その気持ちも理解できる。今後、学校でもそれについて学ぶ時間が持たれていくだろう。これから日本の担う若者達。宜しく頼む。

“話してみるかよ”

「吉村虎太郎との出会い」

イラストレーター 楠本 剛

高知県 津野町教育委員会様からのご依頼で作成した吉村虎太郎の絵本が、この夏、ようやく完成した。吉村虎太郎は、倒幕運動の先駆けとして天誅（忠）組を結成し、その後、わずか一ヶ月余りで戦死。幕末史の中で見れば、活躍した期間はあまりにも短い。

2年前の天誅組結成150年の折に奈良県東吉野村を訪れ、天誅組ゆかりの史跡を案内していただいた。山林や町並みもほぼ当時のままで、彼らが駆け巡ったその足跡を追うごとに、壯絶な情景が目に浮かぶ。「追いつめられても、もはや志を貫くしかない。我々はここで絶えることになろうとも、後に続くであろう同志たちに志を託そう。」・・・虎太郎たちの想いが痛いぐらいに心に刺さる。

私たちが知る虎太郎は、決起にはやる草莽の志士としての印象が強いが、今回の絵本は、地元津野町の子供たちに向けて、虎太郎が故郷土佐でどんな環境で育ち、いかにして新しい国を作ろうとする青年に成長していったか、を物語る内容だ。幼い頃から勉学に勤しみ、庄屋として地元各地のお百姓さんのために活躍したその生き様に触れ、決して、ただ決起にはやるだけの志士ではないということを、子供たちはもちろん、これから幕末に興味を持つ人々にも知っていただければ、と思う。

走れ！虎太郎

吉村虎太郎物語

出図制作：津野町教育委員会 文：鈴木義

